これまでの研究と復原検討計画

奈良文化財研究所　都城発掘調査部遺構研究室
室長　　箱崎　和久

１．大極殿院に関する既往の研究・検討
・1981　平城宮発掘調査報告 11（第一次大極殿地域の調査）
・1990～1993　第一次大極殿院 1／100 復元模型の設計
・2001～2002　第一次大極殿院基本設計準備（文化庁）

２．既往の研究と復原検討会の位置づけ
・2003 年以後の大極殿院内における発掘調査（大極殿院回廊部分を中心に８次の調査）
・基本設計準備における検討の問題点とその位置づけ
・第一次大極殿院の学報製作（～2010 年度）
・本検討会の位置づけ

３．復原検討会の目的とその項目
・検討対象は、大極殿院の東西南北の築地回廊、南門、東西楼、内庭部の諸施設、地形
・大極殿後殿の具体的な検討は、発掘成果もないことから現時点ではおこなわない方針
・復原原案の形状および位置など具現化できる成果を得ることを主目的とする
・全体、築地回廊（含　穴門・脇門）、南門、東西楼、瓦・鴟尾、彩色･飾金具の６部門
・復原案を固めるために、当研究所研究者を中心とする上記６部門の検討会を 43 回計画
（第１回：7/23、第２回：8/24、第３回：9/10、第４回：10/6、第５回：10/15）

４．復原検討会の方針
・遺構および出土遺物から得られる情報を最優先する。
・2002 年基本設計準備を検証し、さらに復原の過程を明確にする
・特定の事例を抽出して参考にするのではなく、可能な限り奈良時代およびその前後の史資料を収集・検討する。
・東アジア諸国の類例も可能な限り検討に加える
・上記の基礎的研究および復原過程を公に示す

５．検討会の成果
・各検討会の成果は録音して活字化し、発表資料とともに検討会記録を作成する
・年度ごとに検討会記録をまとめて冊子にする
・最終的な成果を奈文研学報として出版する

第一次大極殿院地区・検出遺構の概要

奈良文化財研究所　都城発掘調査部遺構研究室
研究員　　大林　潤

１．発掘調査の概要

(1)発掘調査…第2次～第 454 次調査の合計 41 回。合計面積(重複含む)82909.7 ㎡。

(2)時期変遷…Ⅰ～Ⅲ期に大別。Ⅰ期:奈良時代前半、Ⅱ期:奈良時代後半、Ⅲ期:平安時代初頭。Ⅰ期はさらに 4 期に小分。復原は第一次大極殿院が完成するⅠ－2 期とする。

※Ⅰ－1期:平城宮造営当初。第一次大極殿院地区を計画。

Ⅰ－2期:佐紀池と朝堂院を整備し、南面回廊に楼閣建築を増築する時期。

Ⅰ－3期:大極殿と東西の回廊を解体し、掘立柱塀を建てる時期

Ⅰ－4期:地区内の排水系を再整備する時期

2. 検出遺構

(1)回廊…南北 317.9m(約 1080 尺)、東西 176.9m(約 600 尺)、柱間寸法は桁行 4.58m(15.5 尺)、梁行 3.54m(12 尺)の複廊の築地回廊。遺構は、基壇土、基壇外装抜取溝、側柱礎石痕跡、雨落溝、木樋暗渠などを検出。東面回廊で、築地に開く穴門を検出。他の門は未確認。

・西面回廊のゆがみ…Ⅰ－1期の回廊側柱筋を踏襲したとするⅠ－3期の掘立柱塀(東面 SA3777、西面 SA13404)は、東面に対して西面の北部が西にずれる傾向を示す。また、Ⅱ期以降の壇上の遺構の検出高は、西側が東側に比べて低い。すなわち、第一次大極殿院北西部は平面的には西にずれ、かつ地盤が下がっている。この部分は、平城宮造営時に多量の盛土をおこなって整地していることが判明している(315・438 次など)。この原因は、造営以後 1300 年間に及ぶ長期的荷重による沈下に加え、造営以後の地震による沈下も原因とひとつと考えられる。

(2)南門・東西楼…南面回廊中央に南門を、その東西に2基の楼閣建築を検出。南門は、基壇の掘込地業、北縁地覆抜取痕跡のみを検出。基壇幅は、南北 16.1m、東西 28m。『平城報告Ⅺ』では2×5間(梁行 20 尺、桁行両端 15 尺、中央 3 間 17 尺)とする。東西楼は、桁行 4.58m、梁行 3.82m。側柱列を掘立、他を礎石立とする桁行 5 間、梁行 3 間の総柱建物。

(3)磚積擁壁・斜路…擁壁はもっとも残りの良いところで 7 段分が残存する。東西それぞれ 3 カ所で屈曲し、斜路となる。当初の磚積の天端は広場 SH6603 上面から約2mで、磚は 25 段程度と考えられる。

(4)内庭広場

①礫敷:下層礫敷(SH6603A:径5～10cm の礫)、南面回廊周辺のみ中層礫敷(SH6603B:径2～5cm)がのる。

②南北溝:SD7142。広場北方で検出。中層礫敷との重複関係は不明。幅約 1.2m、深さ 15cm の素掘り溝。広場中央通路の東側溝と考えると、側溝間距離(路面幅)は約 37m(125 尺)となる。

③東西溝:SD5590A。中層礫敷にともなう素掘りの東西溝。幅2m 程度、深さ 15cm。南面築地回廊北端から北 16m に位置する。東西楼増築にともない機能しなくなった南面回廊北雨落溝に代わり、内庭の排水を担う。

(5)その他

・幢干支柱、井戸等の遺構はなし。

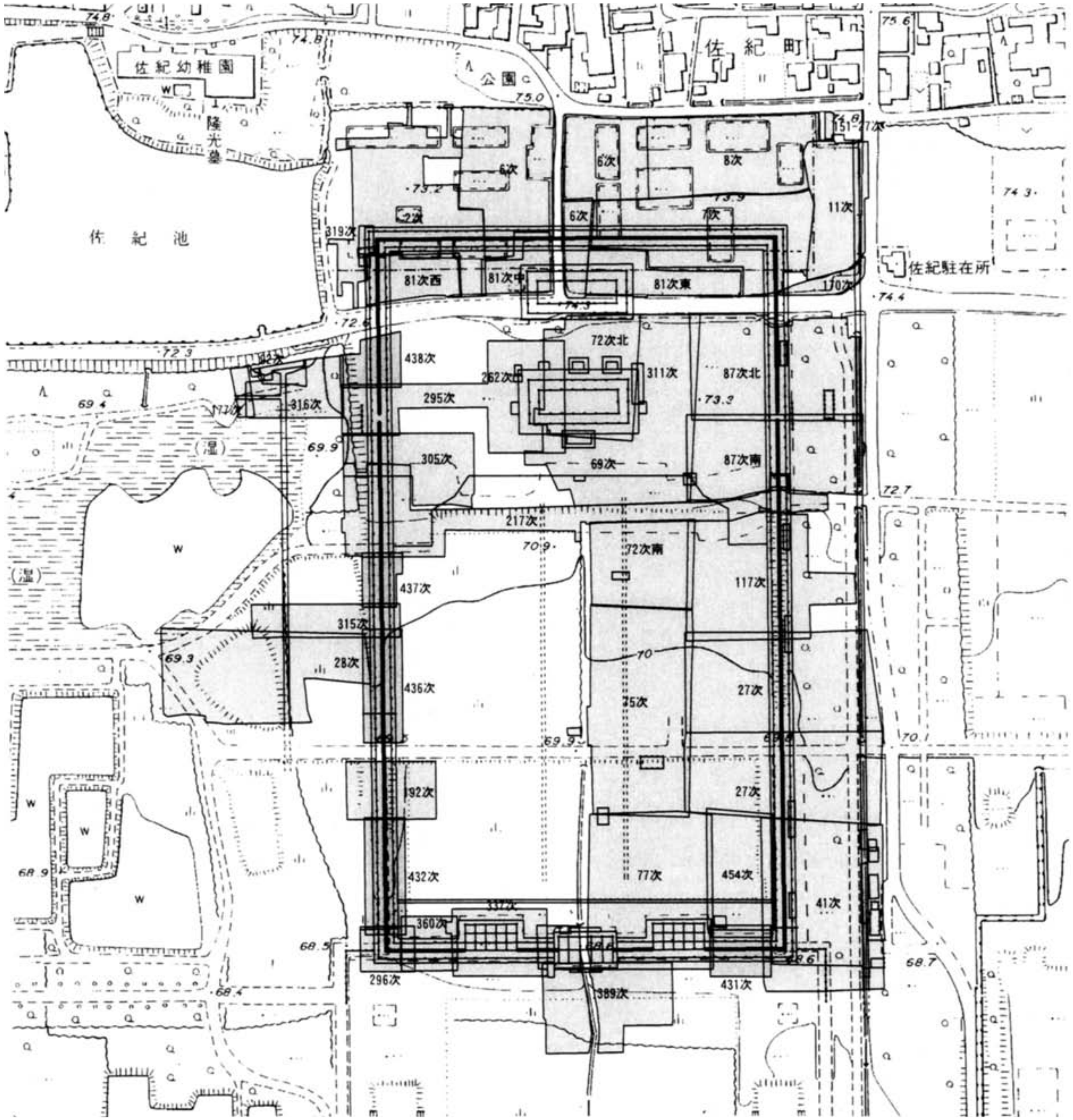

図１　第一次大極殿院調査位置図

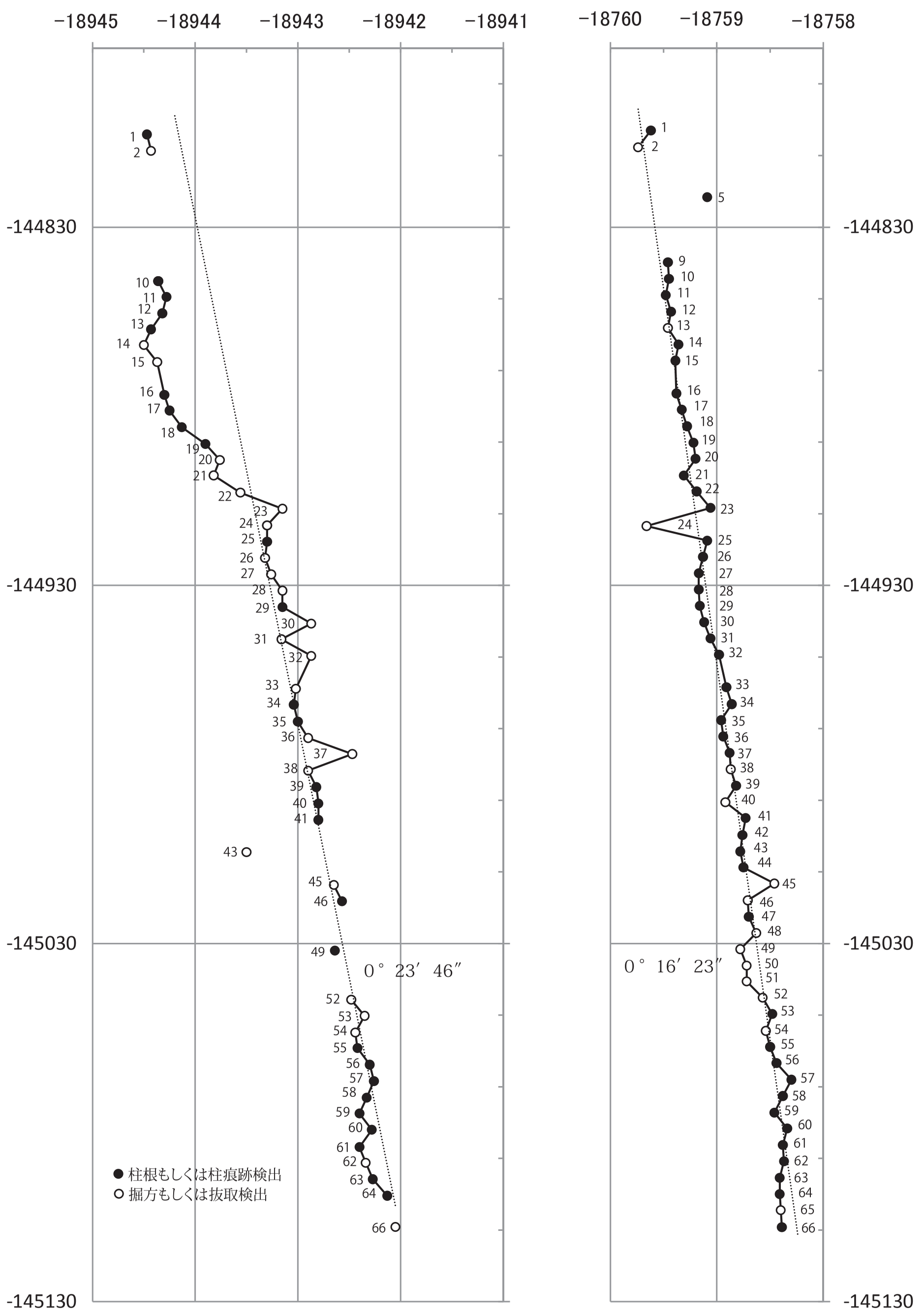

図２　Ⅰ－３期掘立柱塀の傾き

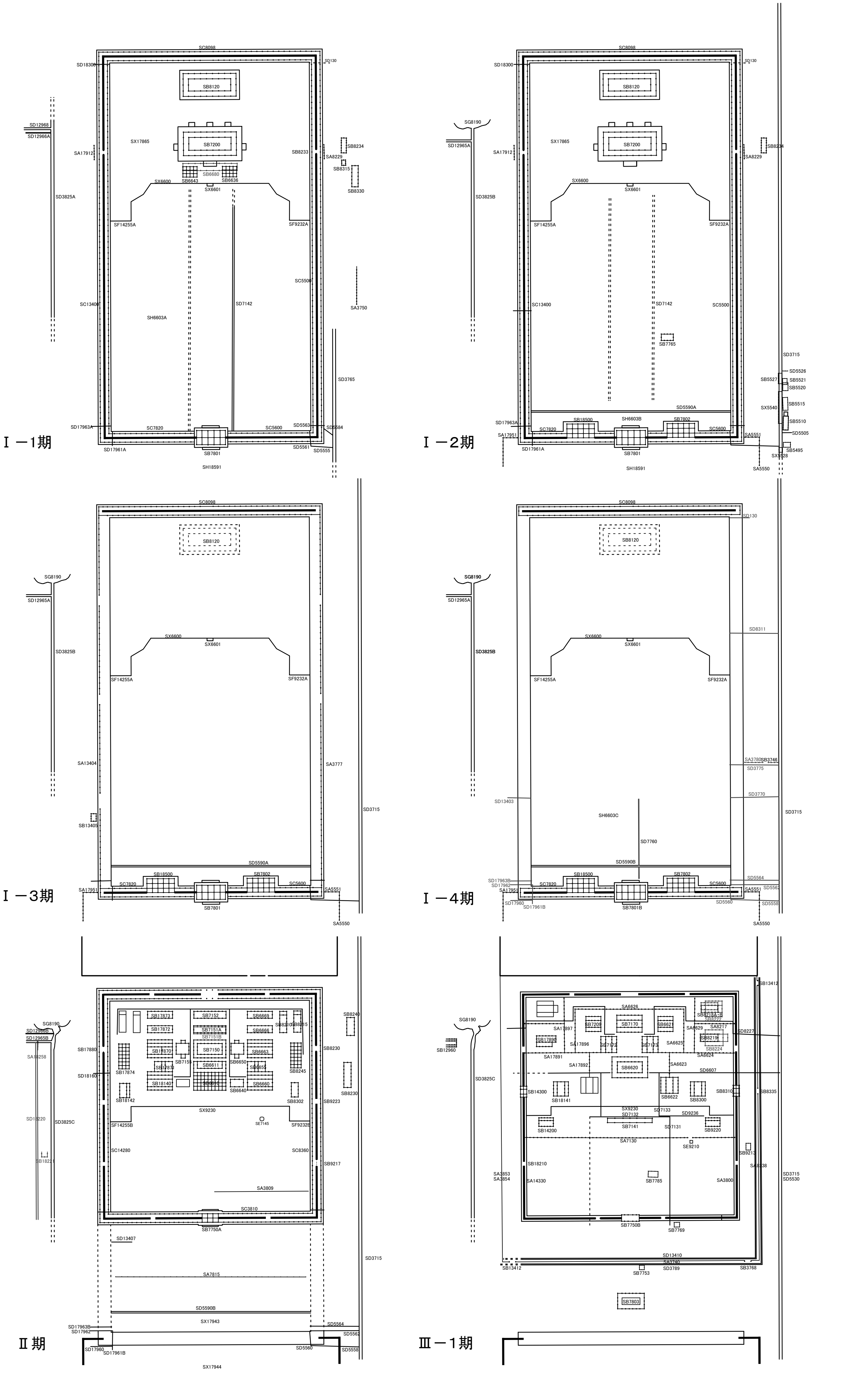

図3　第一次大極殿院遺構変遷図　1:4000

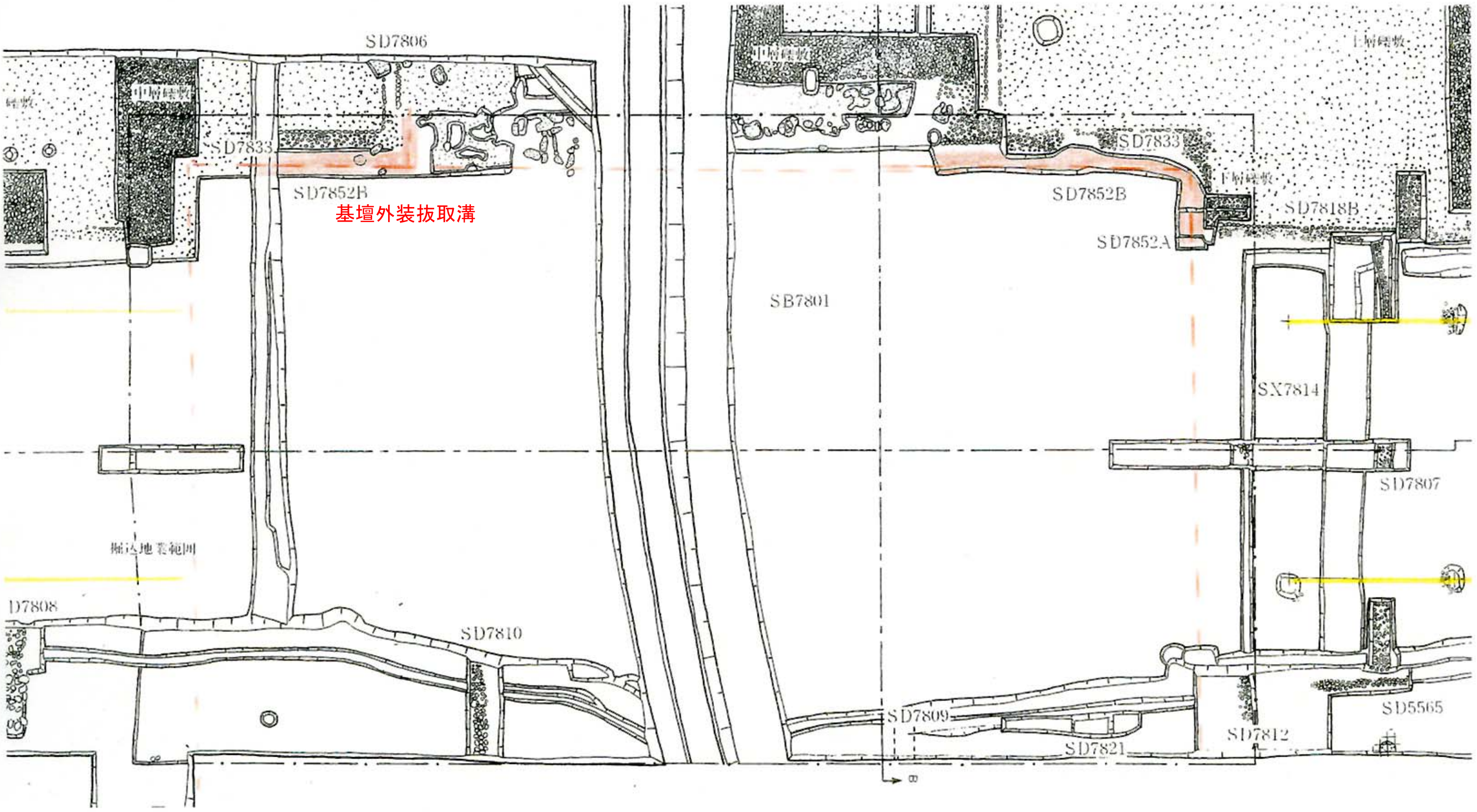

図４　南門 SB7801(『平城報告XI』)

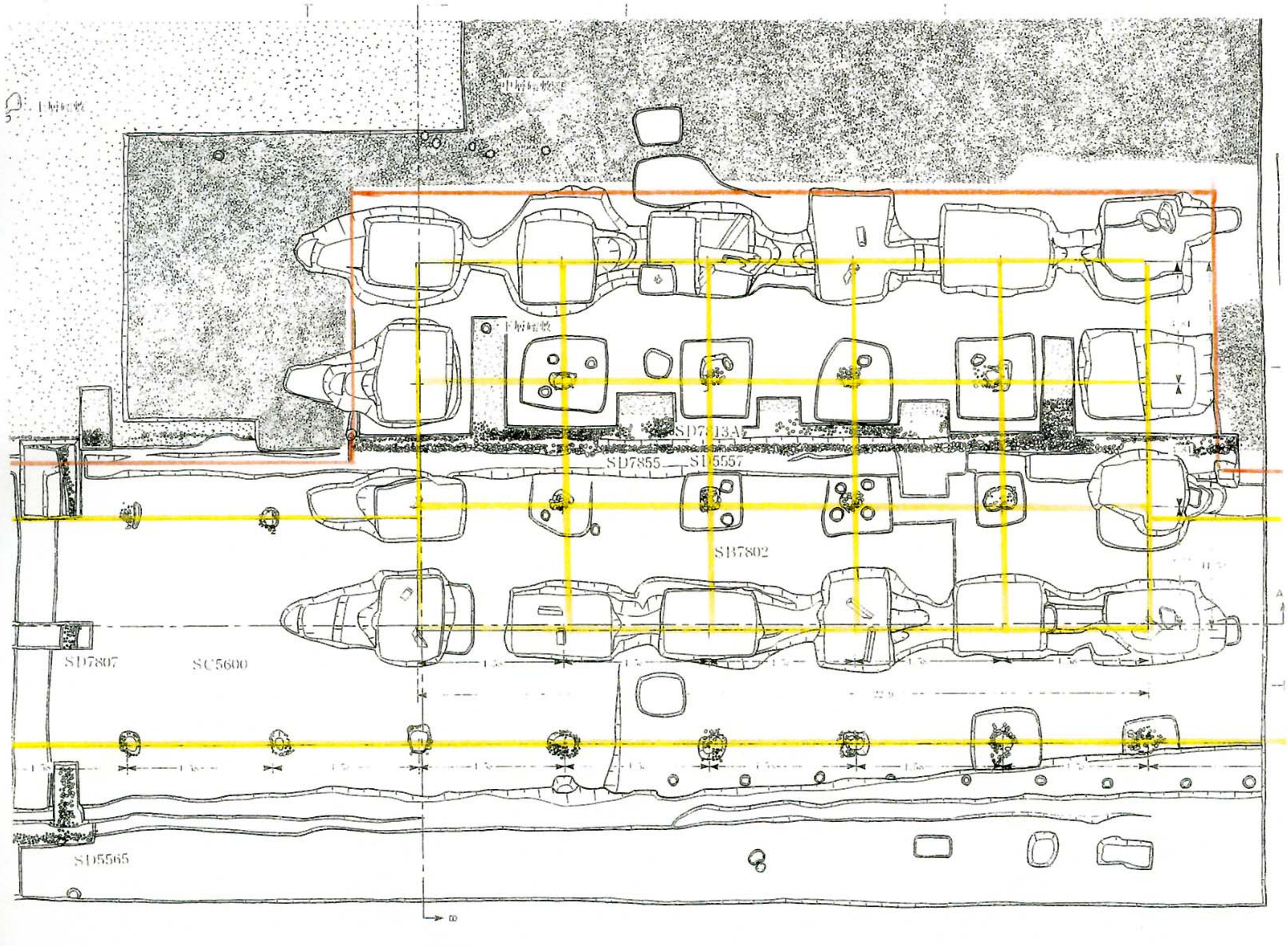

図５　東楼 SB7802(『平城報告XI』)

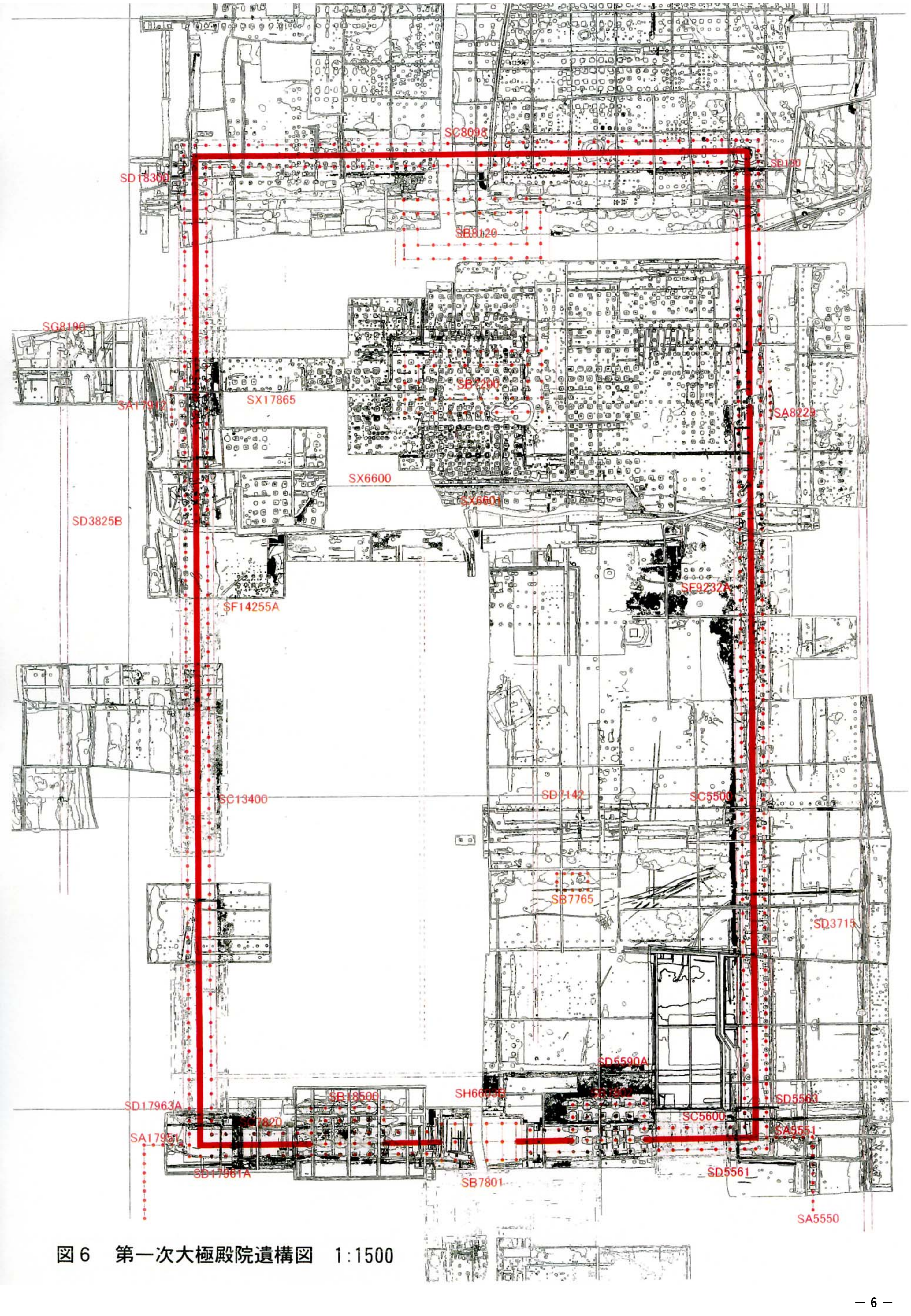

図６　第一次大極殿院遺構図　1:1500